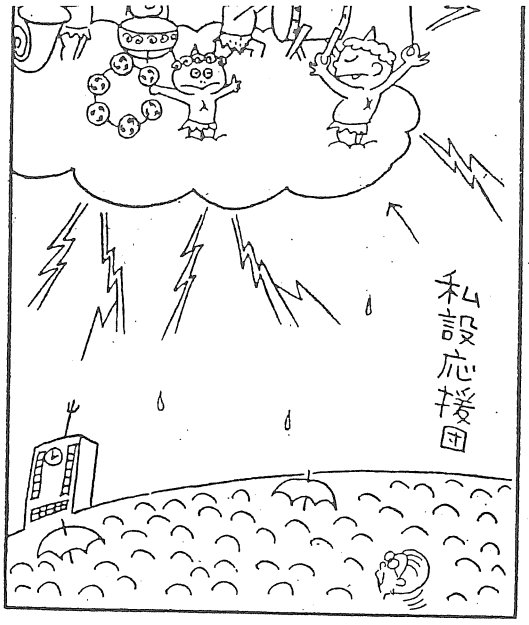
主婦の再趣味

た、バイオリンを再びとり出し、仕事の暇にはギーギー鳴らし始めたからである。

わが〝主婦の再趣味〟に対する周囲の評判の悪さは、奏でる音の不快指数の高さだけが原因でもなさそうなもののどうもひっかかる。

イオリンのレッスンに通っている。習いたてでひどい音なのに「娘が将来、何か、心の糧になればって習わせてるの」と両親は目を細めて得意顔。少女が母親になるころ、周囲は細めた目をつりあげない時代になるのだろうか。

（銀杏）



の人の具体的な行動、ことばを肌で感じたままを伝えている。

若い頃から、多くの政治家に接してきたジャーナリストだからこそ、たくみにその真髄をとらえて読者の心をゆさぶる。

大正九年、衆議院本会議に代議士一年生で代表演説した永井柳太郎のことをのせた当時の新聞を紹介しているが、今の新聞との大変なちがいを知り、学ぶ点をみる思いがする。また議会でのやりとりなど議事録から引用し興味深い。

世相のちがいの影響からくるものなのか、現代の政治家がもちあわせていない包容力、貫禄、清廉さをみんな身につけている。紹介されているエピソードも雄大でいい。懐古趣味ではないが、こんな政治家が欲しいと思わせる。

「政治家が真に襟を正せば、諸悪の大半は消滅するだろう」という著者のことばは、あたりまえのことだが、いいえて妙で共感をよぶ。町会議員から大臣まで、むしろ現代の政治家に読んでもらいたい本である。

（半）

三信図書刊　一八〇〇円

みずみずしい老いの記録

異境への往還から

八木秋子著作集Ⅲ

一九三八年、満鉄新京支社にいた八木秋子は「女人芸術」時代の友だち永島暢子を迎え、敗戦までの交友がつづく。ここに在満邦人のものの考え方、満州の人びとにたいするやり方などが、じつに生き生きと描かれていて、すぐれた記録文学だ。悲劇的な暢子の死までをもっと掘り下げて書かれたらと惜しまれる。

朝鮮に通っての引き揚げから、敗戦直後の混乱、長くつとめた母子寮寮母の記録など。

後半の一九五九年六月二十九日から、六一年一月十一日までの日記が、とくに興味が深い。六十歳の女性のこのみずみずしい感性の動きはどうだろう。芸術への飽くなき憧れ、豊かな人間性、日常に忙殺されて失いがちなそれらをたっぷりもって、思うままに生きている姿はうらやましいようだ。

六〇年六月十一日には、婦人民主クラブ第十五回大会が参議院会館でひらかれたのを傍聴して、祐天寺支部の石川すずさんと国会―官邸―米大使館へデモにゆく。

著作業はこれで完結した。七六年から都立養育院に住み、個人通信〝あるはなく〟と著作集の仕事をしていた。雑居生活で思索をつづけることも忍うにまかせぬ日常を、力づけた相京範昭さんの存在は貴重だ。いま八十六歳、つつがなきことを祈りたい。

（風）

JCA出版刊　二〇〇〇円

（連絡　小平市花小金井南3の9　相京範昭）

声

しい時に、全国には必要もない、高速道路や、後大競技場を建設す。こんな無駄

第二に、教科る右傾化の促進す。七年後の世るか、誰にわかンヘンのゲリラ、コットの様な政巻き込まれ、そしまったら、日よう。また、T手団の入場です。い声と、選手の列を乱さぬ行進を振って迎えるは、いつか見たがるものではな

第三に、日本を、という宣伝・中・高校生が強いて、強化選が大だからです。マネチは、太ら

婦民新聞　81.8.16